

目次

ニュー・イン三十一番の謎

5

訳者あとがき  
302

## 主要登場人物

- ジョン・イヴリン・ソーンダイク……法医学者、法廷弁護士  
ジャーヴィス……ソーンダイクのジュニア・パートナー  
ポルトン……ソーンダイクの助手  
H・ヴァイス……謎の家の主人  
グレーヴズ……ヴァイスの友人  
ミセス・シャリバウム……ヴァイスの家政婦  
ジェフリー・ブラックモア……東洋学者  
ジョン・ブラックモア……ジェフリーの兄  
ステイヴン・ブラックモア……ジェフリーとジョンの甥  
ミセス・ウイルソン……ジェフリーとジョンの姉  
マーチモント……事務弁護士  
ウイルウッド……事務弁護士、マーチモントのパートナー  
ドクター・ステイルベリー……一般診療医  
ミラー……ロンドン警視庁の警視  
ジュリエット・ギブスン……ジャーヴィスの婚約者

ニュー・イン三十一番の謎

「わが友  
バーナード・E・ビショップに」

## 序 文

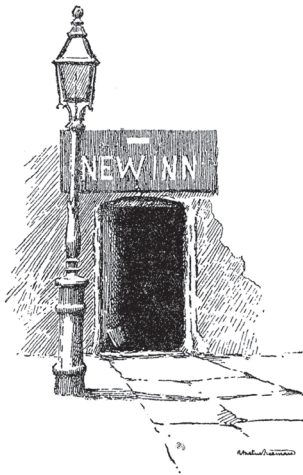
わたしはかつて初期の作品のひとつについて、あくまでも一般的にあり得ることに忠実であろうと留意し、現実には実践できる捜査法しか使わないように心がけたと主張したことがあった。これに對してある批評家が、物語が楽しくなるのなら、そんなこだわりはまったくどうでもよいと発言した。

彼に賛同する人は、まずいのではないのではないだろうか。ほとんどの読者にとっては、それも、この人達を楽しませるためなら徹底的にこだわりたいと作者に思わせるような読者にとっては、出来事や捜査法の完全なりアリズムこそが、探偵小説を面白くする必須要素であろう。そこで、本書の第二章および第三章の中でソーンダイクが軌跡図を作成する方法が、現実に利用されているものだという点に触れておきたい。これは、もう何年も前にわたし自身が考案した方法を修正したものだ。当時のわたしは (フリーマンは一八八七年から九一年まで陸軍の外科医としてアフリカに赴任していた)、アシヤンテイ帝国 (一九〇二年まで現在のガーナにあった王国) を横断してポンドーク (現在のコートジボワールの都市) を目指していたが、内陸深部のボンドークがどこにあるのか、まだほとんど情報がなかった。わたしが受けた命令は、そこにある町、村、川、山のすべての位置をできるだけ正確な地図に描くことだった。だが、一帯に密集する森林の中では通常の測量技術が使えないとわかり、わたしはあの単純で一目乱暴な方法を採用しながら、可能な限り天文観測によって距離を割り出した。

その結果として描き上げた軌跡図は驚くほど正確で、それは往路と復路の図が一致した点からも立証された。この軌跡図は王立地理学会によって発行され、さらに戦争省の情報部が編集した当該地域の地図にも取り入れられ、またわたしの著書『アシヤンティとジャマンの紀行と生活』に添付された

地図の基礎にもなった。そういうわけで、ソーンダイクの計画はかなり実践的な方法として受け入れるべきものなのだ。

この物語の背景となった「ニュー・イン」は、四百年以上も維持され続けた法曹院内の住居棟の生き残りの一つだったのだが、つい最近取り壊された。それでもストランドに立ってそちらを眺めれば、絵のように美しかったホールや寄宿舎や中庭のかわりに新しく建ったスケートリンクの鉄製の屋根の奥に、今でも壊れかけた古い家屋が何軒か（ひよっとすると、あの謎めいた三十一番も）見えるかもしれない。ヒュートン・ストリートにあった裏門も残ってはいるが、アーチ内をレンガで塞がれてしまった。最近その門の前を通りかかったとき、このような簡単なスケッチをしてきた。外部とは遮断された、古きよきロンドンの平穏な一区画がかつて存在した唯一の名残だ。



グリーブセンドにて  
R A F

## 第一章 謎多き患者

ジョン・ソーンダイクと過ごした年月を振り返るとき、ビッグベンの鐘の音が届く範囲に暮らすロンドン市民のほとんどには、けつして味わうことのできない冒険や奇妙な体験の数々が思い出される。そうした経験について、わたしはすでにいくつも書き残してきた。だがどうやら、数ある思い出の中でもおそらく最も信じがたく、驚くべき一件についてはまだ記していなかったようだ。博学で才能豊かな友人ソーンダイクの元で正式に働く出発点となっただけでなく、不満と不遇ばかりだった人生の一時期に終止符を打った点においても、わたしにとっては特に思い出深い一件について。

ソーンダイクとの奇妙な体験の日々をさかのほるように思い出をたどっていくと、とある狭くみずばらしい部屋に行き着く。ロウワー・ケニントン・レーンのウォルワース寄りの端に建っていた家の、一階にあった部屋だ。壁に額縁入りの卒業証書が二枚かかっていることと、書きもの机の上にスネレン視力検査表と聴診器が放り出されているのを見て、ようやくそこが診察室だとわかるような部屋だった。そしてその書きもの机の奥で丸い背もたれの椅子に座っていればこそ、わたしもその医者らしく見えるのだった。

間もなく午後九時になるところだった。暖炉の炉棚の上の小さくてやかましい置時計が九時前を指しながら、わたしに負けないぐらい診察時間が終わるのを待ちわびて、急ぎ立てるようにチクタクと

時を刻んでいるようだった。わたしは泥で汚れたブーツを物憂げに見下ろし、そろそろあの古ぼけたソファの下から恥ずかしそうに顔を覗かせているスリッパに履き替えてもかまわないだろうか、などと考えていた。それどころか、上着のポケットに収まっているパイプにまで思いを馳せていた。あと一分だけ待てば、診療所のガス灯を消し、外扉を閉めてしまってもいいだろう。じれったくなつた小さな時計が「オホン！ 紳士淑女のみなさま、いよいよ九時になりますぞ！」と先走るように、咳払いか、しゃっくりのような音を立てた。ちょうどその瞬間、診療所の給仕がドアを開けて首だけ突っ込み、言葉少なに告げた。「紳士が一人」

単語を極限まで削って話せば、伝えるべき意味は曖昧になりがちだ。だが、わたしは彼の意図を理解した。ケニントン・レーンには、単に「男」や「女」と呼ぶべき人間はほとんどいない。紳士、ばかりなのだ——淑女と子どもを除けば。大将しかいないと揶揄されたりベリア陸軍のようだ。煙突掃除人、肉体労働者、牛乳配達人、行商人——その誰もが家にお抱えの給仕を雇い、騎士の鎧持ちを意味する「アルミゲル」と呼んでいた。その夜お越しの騎士様は、貴族の気晴らしとして辻馬車か大型馬車を運転するのが趣味と見える。診察室に入ると帽子に手を当てて会釈をし、慎重にドアを閉めてから、「ドクター・ステイルベリー」と表書きされた手紙を無言でわたしに差し出した。

「言っておくけど」わたしは封筒を開ける前に言った。「わたしはドクター・ステイルベリーじゃないよ。彼が留守のあいだ、代わりに患者を診ているだけだ」

「かまやしません」男が答えた。「先生で結構です」

それを聞いて、わたしは封筒を開けて手紙を読んだ。ずいぶんと短く、一見したところ特に注目すべきものではなかった。



拜啓（と書き出してあった）我が家に滞在中の友人の往診に来ていただけませんか？ この手紙を届けた者が詳細についてお伝えし、先生を拙宅までお連れいたします。

敬具

H・ヴァイス

紙面には住所も日付もなく、差出人の名前にも覚えがなかった。

「この手紙には」とわたしは言った。「詳細をあなたから聞くようにとあるね。どういふ事情だい？」  
使いの男はばつが悪そうに髪を撫でた。「くだらない話なんですがね」小ばかにしたように笑いながら言った。「わたしが主人の立場なら、放っておくところですよ。病人はミスター・グレーヴズとおっしゃるんですが、とにかく医者嫌いにして。かれこれ一、二週間ほど病に伏せてるのに、頑として医者に行かないって言うんです。主人は彼を説得しようとおの手この手を尽くしたんですが、無駄でした。どうしても医者に行ってくれないんです。ところが主人は、それなら勝手に医者を呼んでくるって言いだしましてね。とにかく、ご友人の具合をひどく心配されています。すると、ようやくミスター・グレーヴズも折れたんですよ。ただし、条件があると。家から遠い診療所に往診を頼むこと、名前や住所はもちろん、自分についての情報を一切その医者には明かさないうこと。主人がその条件を守ると約束するなら、医者を呼ぶのを承知するってね。それで主人はそれとおりの約束し、そんなわけで、それを守らなきゃならないってわけです」

「でも」わたしは笑みを浮かべながら言った。「あなたはすでに患者の名前を言ってしまったよ——

グレーヴズというのが本名だとしたら」

「本名かどうかは、先生がご判断くださればいい」馬車の御者が言った。

「それに」とわたしは重ねて言った。「どこに住んでいるか教えてもらわなくても、行けばわかるよ。目に見えるんだから」

「先生の目に見えるかは、やってみなくちゃわかりません」男が答えた。「今問題なのは、先生が往診を引き受けてくださるのかってことです」

そうだ、たしかにそれは問題だ。わたしは返事をする前に考えてみた。われわれ医者には、<sup>〆</sup>医者嫌い<sup>〆</sup>と呼ばれるタイプの人間についてはよく承知しているし、できるだけ関わりにならない。どうせ恩知らずで、言うことを聞かない患者に決まっている。不快な会話、非協力的な態度、治療に対する不満。わたしが開業医であつたなら、即座に断わつていたところだ。だが、ここはわたしの診療所ではない。わたしはあくまでも代診医だ。気が進まなくても、留守を頼んでいった医者<sup>〆</sup>の利益となる依頼をむげに断わることはできないのだ。

どうすべきかとあれこれ考えながら、なかば無意識のうちにその訪問者をじろじろと、相手が気まぐず感じるほど観察していた。彼の用件だけでなく、そのいでたちもどうにも気に食わなかつた。明かりは机と患者用の椅子に向けられていたため、ドアのそばを離れようとしないう男がたたずんでいる。辺りは薄暗いままだつた。その薄暗がりの中に、どことなく狡猾そう<sup>〆</sup>で好ましくない顔と口髭<sup>くちひげ</sup>だけが見えていた。馬車屋で働くには似つかわない、ワックスを塗つた赤い口髭<sup>くちひげ</sup>だ。いや、それはわたしの偏見かもしれない。男は鬢<sup>かづら</sup>をかぶつていて——それが不名誉というわけではないが——脱いだ帽子を持つ手の親指の爪には怪我で変形した後遺症——それもまた、不気味ではあつても彼の手柄を表して

いるわけではない——が見てとれた。そして何と言っても、不安と意味ありげな満足感とが入り混じった視線でこちらをじっと見つめているのが、わたしをひととき不快にさせた。総じて、その男からは悪い印象しか受けなかった。見た目はまったく気に入らない。それでも、わたしはその依頼を引き受けることに決めた。

「どのみち」わたしはようやく口を開いた。「患者さんがどこのどなたであろうと、わたしには関係ないことだ。でも、どうするつもりだい？ 洞窟の奥にある山賊の隠れ家まで引き立てていくように、わたしに目隠しでもするのかい？」

男はかすかにやりと笑い、明らかにほっとしたように見えた。「いいや、先生に目隠しなんざしませんよ。外に馬車を停めてあります。それに乗っていただく、外はまったく見えません」

「わかった」わたしはそう答え、彼に外で待つようにとドアを開けた。「すぐ支度する。患者さんの具合について、あらかじめ何か教えてもらおうわけにはいかないんだろうね？」

「ええ、何も申し上げられませんか」それだけ言うと、男は外の馬車へ向かった。

わたしは靴の中に応急処置用の薬品を何種類かと診察器具をいくつか詰め込み、ガス灯を消して診察室を出た。馬車は御者が道の縁石に寄せて停めてあり、診療所の給仕が興味津々の様子で見ている。わたしはと言えば、好奇心と嫌悪感が入り混じった思いで馬車を眺めていた。御者席が外についた大型のブROOMの箱形四輪車だったが、移動セールスマンがよく使うタイプのように、車内に積み上げた商品サンプルの箱が外から見えないようにガラス窓の代わりに板の鏡戸が取りつけてあり、扉は忍鏡で外から鍵がかけられるようになっていた。

わたしが家から出てくると、御者がその錠を開けて馬車の扉を開いた。

「どのぐらいで着くのかな？」わたしは馬車のステップに足をかけたままで尋ねた。

御者は少しのあいだ考えてから答えた。

「そうですね、わたしがこちらへ何うのに、三十分近くかかりましたかね」

そいつはなんとも結構じゃないか。片道三十分かけて往復し、患者の手当てにさらに三十分。この分だと、戻ってくる頃には十時半を回っているだろうし、そのときにはきつと間の悪い別の訪問者がドアの前でわたしの帰りを待っていることだろう。まだ見ぬミスター・グレーヴズと、臨時代診医という不安定な己の生き方に対して密かに呪いの言葉を吐きながら、わたしはその不愉快な馬車に乗り込んだ。御者がすぐさま音を立てて扉を閉めて鍵をかけたので、完全な暗闇の中に閉じ込められた。

慰めになるものが一つだけあった。ポケットにパイプが入っていたのだ。苦心しながら暗闇の中でパイプに煙草の葉を詰め、蠟軸マッチで火つけた後、その明かりを利用して牢獄の中を調べてみた。車内は粗末な造りだった。青い布製の座席は虫食いだらけで、長く使われていないことを物語っていた。床に敷いた油布は穴が空くほど擦り切れている。通常ならついているはずの備品類は一つもない。だがこの奇妙な車両には、どうやら今回の目的のために細心の工夫を凝らしてあるらしいことは見えてとれた。扉の内側の取っ手はたぶんわざと取り外してあった。木製の錠戸は開かないように固定されている。そして両側の窓の下に貼りつけてある怪しげなラベルは、馬車の元の持ち主だった馬車業者なり廢舎なりの名前や住所を覆い隠すためのものではないかと思われた。

こうした観察の結果は、さまざまな空想を掻き立てる材料となった。ミスター・グレーヴズとの約束を守るために、ここまで常軌を逸した工夫を凝らすべきだと考えたのなら、そのミスター・ヴァイスとやらは過剰なほど誠実な男にちがいない。約束をただ文字通り守るだけでは、彼の良心は満たさ

れなかつたと見える。あるいは、友人が素性を明かしたがらない理由に彼も共感したのか——なにせ、秘密を隠すための段取りが患者本人によるとは思えないのだから。

その推論から導かれる数々の考えが、わたしを不安にさせた。どこへ、何の目的で連れて行かれるのだろう？ これから強盗の隠れ家に連れ込まれて、何かを盗られるか殺されるかもしれないという発想は、笑いながらすぐに打ち消した。こんなひどい貧乏人から金を盗むために、ここまで緻密な計画を立てる強盗などいるはずがない。そういう意味では、貧乏にも利点はあるものだ。だが、ほかの可能性も考えられる。経験に裏打ちされた空想力は、いともたやすくさまざまな状況を頭に呼び起こした。連行された医者が、力づくかどうかは別にして、何らかの違法行為の目撃者、あるいは実行者にさえさせられる数々の状況だ。

不快ながらもそうした考えにすっかり耽っているうちに、奇妙な馬車の旅は進んでいった。そのうちほかにも気になることができて、退屈さが薄らいだ。たとえば、人は五感のいずれかを奪われるとそれを補おうと別の感覚が強烈に高められることに大いに興味を覚えた。座席でパイプを吸っているわたしは、火皿の中で煙草の葉が燃えるわずかな明かりを除けば完全な闇の中にいて、外の世界について何ひとつわからない状況にあるやに思われた。だが、そうではない。固いスプリングと鉄の輪金を嵌めた車輪によって伝わる車体の振動から、道の特徴がはつきりとの確に浮かび上がってくるのだ。花崗岩の敷石を通るときには激しく揺れ、碎石舗装では優しく飛び跳ね、木塊舗装では細かく震え、路面電車の線路を渡るときには車輪をとられるように大きく傾く。どれもすぐにそうだとわかつたし、それらを合わせれば、今どのような場所を走っているのかを大まかに思い描くことができた。そのうえ、耳から入る情報がさらに詳細を補ってくれた。引き船の汽笛が聞こえると、川に近いことがわか

った。唐突に空洞に入ったように、ほんの短いあいだ音が反響していたのは、きっと鉄道の鉄橋をくぐったからだ（これは目的地に着くまでに何度かあった）。それに、聞き慣れた列車見張り員の笛に続いて、車輪をきしませて走る機関車のシュツシュツという音を聞いたときには、駅を出ていく重厚な旅客列車の姿が、まるで明るい日の下で見ているかのように目に浮かんだ。

ちょうどパイプを吸い終え、ブーツのかかとに叩いて灰を床に落としたとき、馬車が速度を落とした。音がうつろに反響するようになったということは、どこか屋根のある小道に入ったらしい。続いて後方で重そうな木製の門が音を立てて閉まるのがわかり、やがて馬車の扉の鍵を開ける音がして扉が開いた。わたしは目をしばたかせながら、敷石で舗装された屋根つきの私道に降り立った。その先には馬屋があるのだろう。だが辺りが真つ暗なうえに、詳しく観察する暇はなかった。と言うのも、馬車は建物の通用口の前に停まっただけで、開いたドアの奥に蠟燭を持った女性が待っていたからだ。「ドクトルですか？」彼女は明らかにドイツ語訛りのある発音でそう言いながら、蠟燭の炎が消えないように手で覆い、こちらをじっと見た。

わたしがそうだと答えると、彼女は大声で言った。

「よく来てくださいました。ミスター・ヴァイスも安堵されることでしょう。どうぞ中へお入りください」

女の後について暗い通路を抜けて同じく暗い部屋に入ると、彼女は蠟燭を箆筒の上に置いて出ていこうとした。と思うと、ドアのそばで立ち止まってこちらを振り向いた。

「お客様をお通しするにはふさわしい部屋ではありませんね」彼女は言った。「今はすっかり散らかってますけど、どうぞお許しください。とにかくお気の毒なミスター・グレーヴズの容体が心配でか

かりきりになっておりましたので」

「では、しばらく前から具合が悪かったのですかね？」

「ええ、少し前から。周期的に悪くなられましたね。少し良くなったり、また悪くなったり」

そう話しながら彼女は後ろ向きにゆっくりと通路へ出ていったものの、すぐに立ち去る様子は見せなかった。そこでわたしは質問を続けた。

「ほかの医者には診てもらっていないのですかね？」

「そうです。医者は絶対にいやだと一貫しておっしゃるものですから。そのせいで、ほとほと困っていたのです。ミスター・ヴァイスはとても心配なさっていました。先生が来てくださったとわかったら、それは喜ばれることでしょう。これから伝えてまいります。どうぞこちらでおかけになって、今しばらくお待ちください」そう言い残して、主人を探しに立ち去った。

病人を抱えて心配でたまらず、急いで医者を呼んだというのに、どうしてミスター・ヴァイス自身が出迎えに来なかったのだろうかという違和感がちらりとよぎった。もう何分か待っても主人が一向に姿を見せなかったので、その違和感はいっそう強くなっていた。馬車に詰め込まれた後だけにじつと座っている気にはなれず、ぶらぶらと部屋の中を眺めながら待つことにした。たしかに、そこはなんとも奇妙な部屋だった。飾り気がなく、汚れて手入れが行き届かないうえに、明らかに普段使われている様子がない。色あせた絨毯が一枚、床の上に無造作に敷いてある。部屋の真ん中に小さな古ぼけたテーブルがぼつんと置かれ、その奥にある三脚の馬毛織りのカバーの椅子と箆筒以外には家具がなかった。かび臭い壁には絵の一枚もなく、鏡戸を閉めた窓にカーテンもかかっておらず、天井からいくつも垂れ下がった暗い布のような蜘蛛の巣は、蜘蛛たちが長らくここを思うままに支配し続け

〔著者〕

オースティン・フリーマン

本名リチャード・オースティン・フリーマン。別名義にクリフォード・アシュダウン。英国、ロンドン生まれ。1880年にミドルセックス病院付属医科大学に入学。その後、王立外科医科大学などで働く。デビュー作は、アフリカのガーナに植民地付医師補として赴任した際の探検を本にまとめた *Travels and Life in Ashanti and Jaman* (1898)。科学者探偵ソーンダイク博士シリーズは、第一作『赤い拇指紋』(1907)をはじめとして、長編 21 作、短編 40 作以上を数え、「シャーロック・ホームズのライヴァルたち」の代表格とされている。

〔訳者〕

福森典子（ふくもり・のりこ）

大阪生まれ。通算十年の海外生活の後、国際基督教大学卒業。訳書に『消えたボランド氏』『ソニア・ウェイワードの帰還』『盗まれたフェルメール』『間に合わせの埋葬』（論創社）など。

ニュー・イン<sup>さんじゅういちばん</sup>三十一<sup>なぞ</sup>番の謎

——論創海外ミステリ 225

---

2019 年 1 月 25 日 初版第 1 刷印刷

2019 年 1 月 30 日 初版第 1 刷発行

著 者 オースティン・フリーマン

訳 者 福森典子

装 丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル  
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266  
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

---

ISBN978-4-8460-1795-8

落丁・乱丁本はお取り替えいたします